東風谷早苗

一、秘法「くじ挿し」

休日、彼は日がな人里をぶらついて過ごし、夕暮れから馴染みの店で呑んだくれた。徳利を数本空けて、日が落ちた頃になって、そろそろ河岸を変えるかと店を後にした。

月が綺麗に出ている。季節は冬、雪こそ降っていないものの、腹から冷えるように寒い。そのせいか、通りにも人影は少ない。冷水を浴びせかけられるような感覚に、彼はぶるりと身を震わせる。

せっかくの心地良い酔いが覚めてしまう前に、さっさとどこかに入ってしまおう。この辺りに良いところはあったろうか。覚束ない足取りで、彼はふらふら歩き始めた。

ふと、数件先の飲み屋の軒先に、娘が立っているのが見えた。きっと呼び子だろうと見当をつけ、彼は近づいていく。

ところが、呼び子にしては娘の格好が奇妙だ。大きく腋を開いた出で立ち。どこか博麗の巫女を彷彿とさせるが、衣装は紅と白のそれではない。

その娘には見覚えがある。気にはなるが、声をかけるほどのこともない。彼は脇を通り過ぎようとする。

「あっ、そこのお兄さん、ちょっとすみません！」

その足取りは遮られた。件の娘が目の前へ、割りこむようにして躍り出たのだ。

「え？　俺？」

彼は面食らった。それは突然のことに驚いたというのもあったが、しかしそれ以上に、間近で見る娘の可愛らしさに息を呑んでいたのだ。

彼より頭ひとつほど小さな背丈や、くるりと丸い瞳、ふっくらとした頬が、童女のような幼さを感じさせる。それでいて、服の上からもわかるほどはっきり突き出した豊かな双丘は、身体を持て余す人妻のそれにも劣らず実っている。若々しい娘らしい可愛らしさと、成熟した大人の女の艶やかさが、互いを殺しあうことなく、共存していた。

小町と呼ばれるのは、きっとこういう娘なのだろう。じろじろ見るのは良くないと思いながらも、彼は彼女から目を離すことができなかった。

「はい。実は私、守矢神社で風祝をしている東風谷早苗という者なんですが」

「ああ！」

抱えていた既視感の正体がそれでわかった。この東風谷という少女は、以前、天狗の新聞に載っていたのだ。記事に添えられた写真に、確かに写っていた。「山の上に湖と神社が突如現れた」という荒唐無稽な――後にそれは事実だったとわかったわけだが――記事内容もあいまって、記憶の片隅に引っかかっていたようだ。

それにしても、この少女、写真でも充分に可愛らしかったが、それは本物の魅力の

一割にも満たないだろう。二重まぶたを象る長い睫毛や、血の通った暖かな肌、艶のある唇の美しさは、実物を見ないと伝わらないことだ。

「そ、それで、その東風谷さんが俺に何か？」

それだけの美少女に話しかけてもらえるだけでも、充分ツイているというものだ。女日照りの彼にとってはなおさらだ。彼は努めてにこやかに対応する。

「一つお尋ねしたいんですが、守矢神社にいらしたことはおありですか？」

「いや、ないな。さすがに山を登るのはね……」

妖怪の山は険し過ぎるし、何より天狗の縄張りだ。一介の人間がおいそれと訪れることのできる場所ではない。信仰よりも命だった。

「ですよね。通いづらいというご意見が前からあって、それで最近、人里への布教の一環として、出張おみくじを始めたんです。どうですか、引いていかれませんか？」

「そうだな、それじゃあ、せっかくだし引いていこうかな」

宗教に興味はないのだが、早苗のような少女に誘われては断れない。助平心を隠しながら頷くと、彼女は溌剌とした笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます。じゃあ、ちょっとこちらへ来ていただけますか？」

早苗は男の手を引く。後ろから見ると、スカート越しにもわかる張りつめた尻が、

滑らかな曲線を描いているのがわかった。さながら天界の桃のようだ。
どこへ連れて行くつもりかと思っていると、早苗は不意に、狭い路地へ折れ曲がる。入り口には物が積み重ねられていて、外からは少々見えにくい。
「なあ、一体どこへ連れていく気だい？」
くじを引くだけならば、その場で済むはずだ。酔いの回った頭でも、奇妙だということはわかる。少し冷静になってきた。そもそもこんな時間帯に、年頃の娘が飲み屋通りに一人で立っていること自体が不自然だ。
もしかすると、神社だのおみくじだのということは端(はな)から嘘っぱちで、うまいことを言って人気のない場所へ誘い、身ぐるみを剥がすための罠だったのかもしれない。であれば、次に出てくるのはごろつきの類だろう。
いや、金を奪われるぐらいならまだましだが、ひょっとすると命まで奪われるかもしれない。守矢神社は天狗と懇ろだと聞く。ひょっとすると天狗の手先として、人間を拐かすぐらいのことはしているのではないか？　里で人間を襲うのは御法度だが、天狗ほど力のある連中なら、幻想郷を治める大妖怪からお目こぼしをいただくぐらい、楽にできそうなものだ。
一度悪い発想に行き着くと、それを振り払うのは難しい。にわかに肝が冷えるのを

感じた。柔らかで心地良かった早苗の掌が、急におぞましいものに感じられ始めた。
彼は慌てて、結んだ指を振り払おうとする。しかし、それよりも先に、彼女のほうが手を離していた。
早苗は辺りを見渡し、周囲に人気がないことを確認すると、軽く頷いてみせた。
「そうですね、この辺りなら人目にもつかないし、都合がいいです」
「人目にも、って」
おみくじに、そんなものを気にする必要はない。ということは、やはり彼女の狙いは別にあったのだ。的中してしまった懸念に、彼は慄く。話なんて聞かず、最初から無視するべきだった。今から逃げて、振りきれるだろうか。
「……ああいや、心配なさらないでください。単に、守矢式のおみくじは、なるべく人に見られないような場所で引かなくちゃならないって、それだけのことですから」
血の気の引いた彼の表情を見て察したか、早苗は苦笑いを浮かべながら手を振ってみせる。しかし、一度疑心暗鬼に囚われた頭では、どうにも信用ができなかった。
大体、「引くところを見られてはならないおみくじ」など、聞いたためしがない。嘘にしてもおかしな話だ。やはりここはなにか理由をつけて、さっさと逃げてしまうが吉だろう。

そんなことを考えているうちに、彼は信じられないものを目の当たりにする。

——肌色。

最初に頭に浮かんだのは、それだけだった。早苗が、その着衣の前を肌蹴(はだけ)ていた。状況に対し、理解が追い付いて来ない。そして追いついて来ないがゆえ、男としての本能が先に立った。彼は早苗への疑念をいっとき忘れ、露わになったその場所へと視線を注ぐ。

柔らかな肉は戒めるものから解き放たれ、はち切れそうなほど豊かで奔放な曲線を描く。晒しが外された状態にも関わらず、理想のような球形を保っていた。肌理細かな白い肌が包み込む中身のたっぷりと詰まった柔肉は、服の上からもその質量を感じられたが、こうして直に見てみると、掌からも溢れそうなほどの存在感にため息すら零れる。一見しただけで伝わるほどの弾力があり、持ち主の呼吸のリズムに合わせ、わずかにたゆん、たゆん、と震えている。冷気に晒された桜色の先端がつんと尖り、その存在を主張していた。

——女の肌など、最後に見てから何年経つだろうか。

男ばかりの職場では出会いもなく、彼の安月給では色街にも通えない。数年ぶりの女体、それも早苗のそれのような極上のものは、彼にとって刺激的すぎるほどに刺激

的だった。

眺めているだけで、下腹にむらむらと血が集まってくる。うっかりするとそのまま欲望が放たれてしまいそうだ。早苗の肉体は、それほどまでの魅力――いっそ暴力的ですらある――を備えていた。

「ふふ、やらしい目つきですね？」

あやすような口調に彼は我へ返り、気まずさから視線を逸らす。

早苗は咎めるどころか、むしろ胸元を突き出しながら、彼の方へと擦り寄っていく。胸板へと手を這わせながら、囁くように語りかける。

「どうしたんですか？　気が済むまで、すけべな視線で眺めてくださって構わないんですよ？　おっぱいは好きなんでしょう？」

「え、あ」

「ほら、何なら触ってくださっても、ね？」

早苗は彼の手を取り、自らの放埒な乳房へと導く。おお、と彼は感嘆の声を漏らす。今までに触れたどんなものよりも柔らかで滑らかな、至福の感触が伝わってくる。

触れてしまったが最後だ。彼女の肉体は、あらゆる男に対し、筆舌に尽くしがたい魔性を発揮してくる。生物が引力から逃れられないのと同じことだ。

彼の頭にはもう、目の前にある二つの果実のことしかなかった。
鼻先がぶつかりそうなほどの距離で凝視しながら、彼は乳肉を撫でさする。最高級のシルク――実際、それに触れたことはないが――すらも、この手触りには劣ることだろう。
間近で見てみると、色艶の良さがはっきりとわかる。白磁のような肌は透き通り、皮膚の下に走る薄青の静脈をうかがわせている。撫でるたびにうっすらと熱を帯び、先端と同じような桜色を帯びてくる。彼が興奮しているのと同様、早苗も彼の愛撫に官能を覚えているのだ。それは彼にとって、いや、あらゆる男にとって、たまらないことだった。
早苗の吐息が、耳元に吹きかかる。綿毛で撫でられているかのようなくすぐったさと心地良さが、彼の頭から理性をがりがりと削り取っていく。
指先に力を込めて、掌から溢れるほどの乳肉に指先を沈ませる。指にぴったり吸い付くように形を変えながらも、確かな弾力でしっかりと押し戻そうとする。人の身体が、これほど蠱惑的になれるものだったとは。
「んぁ、は」
熱い吐息にかすかに混じる、早苗の小さく淫靡な喘ぎが、彼の股座の獣を狂おしい

ほどに昂ぶらせていた。そこは首輪を引きちぎろうとする狂犬のように、衣服の中で暴れていた。

この双つの肉塊、ひいてはこの女を、思うままに蹂躙したい。そんな暴力的な欲望を彼は覚える。

――ええい、誘ってきたのは向こうなのだ。この際、何を気にすることがある！

本能の呼び声に彼は操られ、欲望を満たそうとする。ところが、早苗は身を引くと、彼の手を引き剥がした。呆気にとられる彼に、早苗は小悪魔めいた表情を浮かべる。

「そちらに夢中になるのもいいですけど、本来の目的を忘れてもらっては困りますよ」

「本来の……って、ああ」

おみくじ、ということを思い出すのに、少し時間がかかった。久々に見た女体の、神秘的ですらある美しさに、すっかり酔いしれきっていたからだ。

もし今ここに鏡があれば、彼は自らの表情の情けなさを知ったことだろう。股間のものは滾りを向ける先を失い、無為に張り詰めている。かといって、自分で扱くのは、あまりにも哀しすぎる。

「あら、そんな顔をしないでください。せっかくの守矢神社の、ありがたいおみくじなんですから」

そう言われても、おみくじのありがたみなど、女の肌を嬲れることに比べたら屁のようなものだ。花より団子という言葉があるが、この場合、おみくじに花ほどの価値があるだろうか？　そして早苗の身体は、団子などよりずっとずっと貴重なものだ。口には出さないが、その考え自体は伝わったのだろう、早苗は僅かに不満気な表情を浮かべる。

「もう……、これだから男の人って。まあ、実際に守矢式おみくじを引いてみれば、そんな態度はとれなくなりますよ」

二人の声以外に物音もない路地に、しゅるりと布の擦れる音が響く。再び、肌色が顕になる。早苗がスカートを下ろしたのだ。

「……え？　えっ？」

早苗がしたのはそれだけだ。にも関わらず、その秘唇はすでに剥き出しになっていた――つまり、彼女は下着を着けていなかったということだ。もっといえば、その淫らな口は、ピンク色をした太い棒状のものを咥えこんでいた。張り型（バイブ）だ。

「うふふ、どうですか？　じっくり見てくださいね？」

本当に、信じられないことばかりだった。狐か狸にでも化かされているのだろうか。裏路地（こんなところ）で性行為（こんなこと）に及んでいるなど。

だが、仮に化かされていたとしても、彼にとっていっそ幸福ですらあった。こんな美体、こんな痴態、彼には想像することすらできなかっただろう。まやかしや幻であったとして、何の不利益もない。

早苗自身、「じっくり見てくださいね」と言っている。今更、何を遠慮することがあるだろう。億面もなく、彼はそこを凝視する。

乳房や尻肉の発育から予想はできていたが、幼気な顔つきに対して、下腹には淫靡な茂みが生え揃っていた。しかし決して下品ではなく、むしろよく整えられた庭園を彷彿とさせる。であれば、震える張り型の刺激に蜜を溢れさせる秘穴は、一流の庭師が熟慮の果てに設計した泉といったところか。泉から流れだす蜜は小川のように太腿を濡らし、月光を朧気に反射している。

彼は彼女の身体を彫刻と錯覚しそうになる。あまりにも美しすぎたからだ。それは自然の産物には決して至り得ない美しさ、そして淫らさであるように思えた。あえて例えるならば、女神だ。

「さあ、そこが守矢神社のみくじ筒ですよ。吉が出るか凶が出るかは、引いてみてのお楽しみです」

みくじ筒と呼ばれたのは、他ならぬ早苗の肉体――刺激に悦び涎を垂らす、貪欲な

淫口だった。そしてそこから引かれるべき「おみくじ」とは、その口の中でぶるぶると震える、張り型のことだ。

「へ、へへ。なんだ、そういうことなら、いくらでも引けるさ」

相変わらず宗教に興味はないが、それでも彼は今、神を信じろと言われたら信じることだろう。こんなおいしい思いができるなど、まさしく神からの贈り物（プレゼント）に違いない。

そして彼は、その贈り物を思う存分味わうつもりでいた。張り型の端を掴むと、下へとゆっくりと力を加えていく。彼の股間にもある、雄の欲望の象徴を模したそれが、彼女の最も淫らな縦穴からずるずると這い出でる。媚肉がぬるぬると絡みつく感触が、道具越しにも伝わってくる。

「はぁっ、ぁふん」

表面にいくつも備えつけられたイボが一つ、また一つと外気に晒されるたび、早苗は悩ましげな声をあげ、腰を震わせる。

「腰が動いてるよ。だめじゃないか。みくじ筒なんだから、じっとしていなくちゃあ」

「もうっ、わかってて言ってるでしょう。早く引いてくださいよ」

「おっと、たかだか筒（どうぐ）風情が声を出しちゃだめだろう。これは罰がいるな」

言うと彼は、半分ほど引きぬかれていた張り型を、再び根本まで早苗の体内に突き

込んだ。一息にだ。先端が柔らかなものにぶつかる感触がした。彼女の奥の奥、最も重要な場所への入り口を突いたようだ。

「ンひっ！」

驚かされた子供が飛び上がるように、早苗はびくりと身体を震わせる。不意打ちの一発は彼女の身体に強く響いたようで、悲鳴のような短く鋭い嬌声が口から零れ出た。

その反応に、彼はサディスティックな衝動を覚える。この女体をもっとよがらせてみたい。腰が立たなくなるまで苛め抜いてやりたい。彼の肉棒が、彼自身の脳を支配しつつあった。

彼はそのまま息もつかせず、張り型での抽送を始める。早苗は身体を跳ねさせた。

「っ、あひぁ、駄目ですよ、おみくじはそうやって遊ぶものじゃ、あぁン！」

裏返った声で抗議しつつも、その身体は言葉と裏腹に、彼の与える快感に反応する。打ち込まれる杭の刺激に堪えかねたか、早苗は壁に背中を預け、膝をがくがくと痙攣させる。張り型の運動にあわせ、蜜壺はじゅぶじゅぷと音を立てて涎をまき散らす。弾けた淫汁が、ぴ、ぴ、と飛び散って、地面に黒い染みをつくる。感じていることは、端から見ても明らかだ。

早苗は彼の手に両手を添える。やめてほしいとでも言うつもりか。しかしその手は、

彼の手を妨げるどころか、むしろその動作を助長するように動いていた。
「ひぃん、堪忍してくださいぃ、こんなんじゃ簡単にイッちゃいますぅぅ!」
彼女の口調からは、先ほどまでの余裕も失せていた。ひぃ、ひぃと裏声を零しつつ、下唇を噛み締めて堪えている。その表情は甘い官能にほだされて色気を漂わせる一方、絶頂に近づくときの焦燥感を浮かべてもいる。彼は舌なめずりをした。
彼の目は、早苗の弱みを突いたという優越で、妖しい光を孕みはじめていた。彼は早苗の逆三角の茂みへ粘っこい視線を向けながら、やはり粘つく声色で彼女を責める。
「毛深いのは淫乱の証拠って聞くけど、君も結構毛深いんじゃないか、へへへ。それに、あふれたオツユでじっとり湿って、いやらしい」
早苗の茂みは愛液に濡れそぼち、てらてらと輝いている。彼は続けて、陰唇の上端近くでぷっくりと自己主張する肉豆へと指を滑らせる。そこは真っ赤に充血し、刺激されるのを今か今かと待ちわびているようだった。
「クリトリスもこんなに膨れ上がって、これは虐めてあげないと可哀想だな」
にやにやと笑いながら、指の腹でなぞっていく。
「ああーッ、すごい、チカチカしますっ」
こりこりとした感触の度、早苗は切ないような声をあげてそれを悦んだ。

「あァ、そうです、そこ敏感だから、早苗のお豆をもっと虐めてあげてくださいいい」
「もちろん。そらそら」
「んあああぁーッ！」
二指で挟んで揉みつぶすようにしつつ、再び張り型で胎内を掻き回していく。抽送の際の抵抗が増す。早苗の膣が、玩具を離すまいと締め付けているのだ。
「おっと、こんなにキュウキュウ締め付けて、これじゃおみくじが引けそうにないな。そうだな、一回イかせれば良いかな？」
「はひっ、はひっ、イかせてください、駄目なみくじ筒がきっちりお仕事をこなせるように躾けてくださいぃ！」
表通りにまで響くような法悦の叫び声をあげ、狂ったように頭を振りながら、早苗は懇願する。そんな態度で頼まれ（ねだられ）ては、男としては当然、応えないわけにはいかない。
「よしっ、それなら思う存分イき狂っちまえ、おらっ！」
ずどん。
擬音をつけるならばそういう表現が相応しいような、肉穴を貫かんほどの勢いで、彼は早苗の肉穴を穿つ。
一瞬、静寂が訪れた。

「――んひぃぁぁ！」

天地がひっくり返ったかのような絶叫。驚きからでも、悲しみからでも、怒りからでもなく、悦びからくるそれは、天界の音楽のように、雅に彼の聴覚を埋め尽くす。

彼の手に暖かな液体が撒き散らされる。愛液を噴き出し、桃色の張り型を千年ぶりに再会する恋人であるかのように抱きしめながら、彼女のヴァギナは絶頂に達した。

早苗はぎゅんと全身を反り返らせ、びく、びくと二、三度震えた後、膨れ上がった風船から空気が抜けるときのように、しなしなと崩れ落ちた。勢いで、張り型が膣から引き抜かれる。

彼は先ほどまで早苗の最も重要な場所を犯していたその玩具を、彼女の体へ向けていたのと同じ視線でじっと見つめる。早苗の性感の証拠がたっぷりとまぶされており、月明かりに照らされてねっとりと淡く光を跳ね返している。たかが道具が、これほど卑猥に見えることがあるとは。彼の感嘆の息は興奮によって熱され、白い靄となって中空に吐き出された。

ふと、彼はその張り型に、奇妙な点を認める。「本物」でいうところの亀頭の辺りに黒く書かれた一文字。

凶。

彼はしばし考えこんだが、やがてその意味に思い至った。おみくじだ。そういえば張り型は、あくまでくじという扱いだったか。

それにしても凶とは。笑ってしまう。こんな良い思いができて、ツイていないなど、到底信じられない話だった。

「うふ……結果、どうでした？」

いつの間にか早苗が立ち上がり、彼の横から張り型の文字を覗きこんでいた。その瞳は先ほどの余裕を取り戻していたものの、絶頂の余韻に酔いしれているのが窺えた。

「凶ですか。まずいですね。守矢のおみくじはよく当たるんです。凶とくれば確実に良くないことが起こってしまいます」

「それじゃ、どうすればいいって？」

脅かすような早苗の言い方にも、彼は動じない。むしろ冗談めかした口調で返す。

すると彼女は、唇と唇が触れ合いそうな距離まで顔を近づけて、閨での娼婦のような艶っぽい声色で言う。

「不幸は、身体に溜まった良くないものが引き起こすんです。だからたっぷり、それを搾り出さなくちゃ、ね？」

彼女の瞳は熱に潤み、暖かな吐息は甘い。白い指先が、彼の服の内へと潜り込んだ。

羽毛のように柔らかで微かな感触が胸板を撫でる。ひんやりとしていて心地良い。
指は乳首をくるくると撫で、胸板や腹筋の谷間をなぞるようにしながら、少しずつ下へと降りていく。下衣まで辿り着くと、彼女は手を滑りこませ、灼鉄のように熱く硬直するそれを優しく包み込む。
「うおぉっ」
自分以外の手がそこに触れるなど、何時(いつ)ぶりのことだろう。まして、商売女の事務的なそれとは違う情熱的な手つきなど、初めて経験することだった。柔らかく滑らかな感覚に、彼は触れられただけで腰を震わせる。
「ほら、火傷しそうなくらいに熱くなってますよ。立派ですねぇ」
彼女は続けて、その根本でパンパンに膨れ上がった二つの球もゆっくりとさする。解すように優しくマッサージされ、その場所が活発に白濁を生産し始めるのが、自分でもはっきりと感じられた。
「この中で、あなたの良くない(ザーメン)ものが今ぐっつぐつに煮えてるんですよ。ちゃあんと出さないと、澱んじゃって身体に悪いんです。だから、ふふ、私がたぁっぷり厄祓いしてさしあげます」
言うと、彼女は屈みこんで、彼の下衣をずらし、肉棒を露出させる。猛々しく滾る

それへ、うっとりとした視線を向けた。指先で亀頭から根本にかけてつつつ、と撫で、弄ぶようにやわやわと扱く。

限界近い我慢を重ねていた彼のモノは、既に先走りをにじませている。早苗はその微かに青臭い汁をローションのように竿全体に塗り広げ、にゅるにゅると扱き上げた。

「すっごいですねぇ。こんなに立派なもの、久々に見ました。さぞかし厄が溜まってるんでしょうねぇ。これは祓い甲斐がありそうです」

早苗はうっすらと微笑み、唇から舌を突き出すと、根本から先端にかけ舐めあげる。刺激にペニスがびくりと反応し、また汁を零れさせる。尖った舌先の鮮やかな紅色が蛇のようで、危なげな妖艶さを醸しだしていた。

「ああ――男の人の匂い。欲求不満が溜まりに溜まった匂いですね。好きなだけ解放しちゃっていいんですよぉ？」

言いながら、早苗は艶のある唇で亀頭を挟み込む。独立した意思を持つ別の生き物のように、腰と肉棒が跳ね上がる。

「うお、こ、これは」

「さっきいじめていただいた分、たっぷりお返ししてあげますね……？」

ぷっくりとしたリップの柔らかさと暖かさ、心地良さ。自らの手で慰めたのでは絶対

に味わえないものだ。
彼の様を見て早苗は満足気に微笑むと、彼のモノを口腔の中へ、見せつけるようにゆっくりと迎え入れる。ぬめつく口壁とざらつく舌の感触に同時に責め立てられ、腰全体が快楽という暖かなスープに浸かっているような感覚を覚える。ぞくぞくとした感覚が背筋から頭へと這い上がり、彼は思わずうめき声をあげる。
根本まですっぽりと、彼女の口腔に飲み込まれる。唇が根本を扱きあげる。雄臭さを楽しむかのように、早苗は鼻で深く息をする。
その間も、彼女は手を遊ばせておかない。中がしっかりと詰まった袋を掌で包み、再びマッサージしていく。子種が沸き上がり、放たれる瞬間を今か今かと待ちわびる。
「んふふ」
早苗は血を漲らせた亀頭を口壁へ押し付け、そのまま頭を動かして滑らせる。頬が膨らむその様は、さながら幼子の歯磨きのようだ。もっとも、歯磨きと違い、むしろ口内は穢れることだろうが。
それにしても、早苗の技術は彼の想像をはるかに超えていた。もちろん、彼の経験がそうそう多くないこともあるとはいえ、色街で買えるような女に、これほど熱心で巧みな奉仕をする者など一人としていないだろう。彼はその快感に対してはもちろん、

己の幸運にも酔いしれていた。こんな経験、一生かけてもできるかわからない。
「あぁ――良い、すごく気持ちいいよ。最高だ」
思わず、そんな言葉を漏らした。ほぼ無意識のことだったが、それは彼の内心そのものでもあった。ひどく恍惚とした声色だった。
早苗は目を細めると、一旦彼のモノを口から離す。
「あらあら。そんなことを言われたら、お祓いにも熱が入るってものです。『サービス』したくなっちゃいますよ」
そう言うと彼女は胸を張る。たっぷりとした乳房が突き出され、ぷるん、と蠱惑的に震えた。先端がツンと可愛らしく上向いて尖り、彼女の興奮を端的に表している。それを見ていると、手垢が擦り込まれるほど揉み潰してやりたいという嗜虐的な衝動に駆られる。しかし、彼が衝動に従うよりも先に、早苗が動いた。
「ふふ、私の自慢の身体、たっぷり味わわせてあげます」
早苗は双丘に両手を添え、魅惑の谷間を強調し、唾液にぬめる剛直を挟み込んだ。
「うおお!?」
様々な意味で彼は驚いた。まず、こんなことの出来る早苗の豊満な身体に。そして、一物で感じる、彼女の乳の有無を言わさぬ心地良さに。初めから、こういう使い方を

するものとして、美の女神が手塩にかけて育ててきたかのようだった。最高級の毛布に包まったときですら、これほどの心地良さは得られないだろう。

「本当に、良い反応をしてくれますね。嬉しくなってきますよ」

彼のモノは早苗の双乳にすっぽり包まれ、谷間からどうにか亀頭が顔を出している。ごくりと、生唾を飲む音が響いた。これで動いたら、どうなるだろう。

「ほら、こういうのはどうですか？」

服を揉み洗いするときのように、交互に乳を擦り合わせる。唾液が潤滑液となり、にちにちと音を立てる。肉幹が乳肉で摩擦され、彼は身体の奥底からこみ上げてくる衝動を感じた。腰の抜けるような、快楽の衝動だ。

「すっごく熱くなってます。びくびく脈打ってるのが胸から伝わってきてます。逞しいですねぇ。こんなにすごいおちんちんから出る厄（せいし）って、どれだけ濃いのかしら」

そのマッサージは、口で吸い取り蕩かす愛撫とはまた違っていた。身体の内側から解すような快感を与えてくる。しかし、どちらも極楽だということは共通していた。

彼のモノは今にも爆発だったが、彼はそれを必死に抑える。もちろん射精したい。しかし、その一方で、この感触をもっと味わいたくもあった。欲望をぶち撒けるのは、たっぷりと楽しんでからでも良い。

「ほぁ、こういうのも」
早苗は舌先を伸ばして、露出する亀頭をちろちろと舐る。塩気が甘味を引き立てるように、その刺激がアクセントになり、快楽は何倍にも感じられた。
「うぅ、くそっ、こ、こ、腰がッ」
早苗の技術は、彼の意志の力を軽く上回っていた。射精への渇望は理性による統御をあっさりと振り切り、彼に代わってその身体を動かす。
「あはっ、その調子その調子。私のおっぱいにあなたのおちんちんの匂い、たっぷり染み込ませてくださいね？　ほら、もっともっと、ね？」
早苗は嫌がるどころか、乳房を両手で支えてピストンを受け入れる。先走りと唾液が白く練り上げられその肌を汚していく様は、なんとも卑猥だった。
もはや我慢などできなかった。とにかく射精することばかりが頭にあった。早苗の華奢な身体めがけて腰を叩きつける。彼女の双丘は彼のモノをみっちりと包み込み、抽送にあわせて柔軟に形を変える。たぷたぷとした肉が、腰を打ち付けられるたびにぱん、ぱんと音を立てる。
彼も早苗も、真冬の夜空の下であるにも関わらずその肌を上気させ、うっすらと汗までかいていた。

――ひどく暑い。それは、酒の酩酊感だけが原因ではない。
「あぁん、いつ射精(だ)してくれてもいいんですよぉっ。たっぷり溜まったドロッドロのザーメン、早苗のおっぱいにたっぷりぶちまけてくださいねぇ？」
「上等ぉぉっ……！」
そうまで言われては、射精さないわけにはいかない。体内から剛直へと駆け上がる欲情とシンクロして、彼は早苗の身体を突き飛ばすほどの勢いで腰をぶつけた。
「ッ、ぐぅぅ！」
溜めに溜められた欲望が、尿道を迸り、ぼびゅるぼびゅると放たれる。濃縮の上に濃縮され煮えたぎった子種が、興奮に赤く染まる早苗の肌をべちゃりべちゃりと白く汚していく。睾丸の中身を全て吸い取られているかのようだ。
ああ、自分で擦(オナニー)るのでは、こんな気持ちの良い射精は味わえない。
一方の早苗は、恍惚とした表情を浮かべ、雄の匂いを放つ汚濁を受け止めていく。たっぷりとした乳肉で、射精にあわせて激しく脈打つ彼のモノを根本から扱き上げる。噴火がすっかり終わってから、彼女はようやくそれを解放した。
「んん、すごいですねぇ。くっさぁくて、濃ゆくて、どろっどろ。こんなのがここに溜まってたら、当然、身体には害になっちゃいますよね」

溜まりに溜まった欲望を放って一回り萎んだ彼の睾丸をうっとりとした瞳で眺め、早苗は心からの満足を表すような声色でそう言った。

早苗は指先で己のたぷたぷとした胸元に溜まる白濁を掬い取ると、彼に見せつけるように舐め取っていく。上等な酒を楽しむときのように、口を閉じて舌の上で転がし、その香りを心ゆくまで味わっている。その行為は、彼をまた興奮させていく。

「んふふふ、精子の一匹一匹が私の舌の上で踊ってるのがわかりますよ。私のことを孕ませようと必死みたいですねぇ。口の中まで犯されちゃってるみたい」

絡みつくような視線の前で、早苗は喉を鳴らし欲望を嚥下する。さらに、両の乳房を揉み合わせるように擦り合わせ、へばりついた白濁を肌へと塗り込めていく。

「ほら、ねぇねぇ、見てますか？　私のおっぱい、あなたの精液でマーキングされていってますよ？　どんどん真っ白に汚されていっちゃう」

むにゅりむにゅりと形を変えるたび、白濁がぬとぬとと細かく泡立ちながら、彼女の果実をデコレートしていく。月明かりに照らされて、妖しい輝きを放っている。

「はぁ……私も、なんだか興奮してきちゃいましたよ」

汚濁の撒き散らす雄のフェロモンに頭まで侵されたか、早苗はどこか惚けたような表情で、蜜を湛える己の秘泉に指をくぐらせる。

「んっ、おちんぽの臭いが一杯で、こうしてるとおまんこ犯されてるみたい」
とめどなく愛液を溢れさせる陰裂は、彼女自身の侵入を、淫らな水音をたてて迎え入れていく。薄白に染まった乳頭を指先でこねくり回し、そのたび淡い嬌声をあげる。
月光の下、誰もが振り向くような美少女が、顔も胸も精液だくになりながら自慰に耽る。絵に残せばどんな春画より卑猥なものになるだろう。一瞬たりとも見逃すまいと、彼は瞬きの暇すら惜しんで、その光景を記憶しようとしていた。彼のペニスは、先ほどの激しい射精にも関わらず、再び元の――否、元以上の硬度になりつつあった。
「あらあら、あれだけ搾り取ったのにまだそんなに硬くなっちゃうんですね。これは、口や胸で祓(ヌいて)ってあげるだけじゃ不十分みたいですね?」
早苗は立ち上がると、彼に背を向けて壁に手をつく。
腰を突き出したことで、うっすらとセピア色をした窄まりや、濡れそぼち収縮する蕾が、彼の視界に丸々とさらけ出される。張り型や自身の指で散々嬲られてきたそこは、それでも満足することを知らないかのように蠢き、見る者の欲望を掻き立てる。
光に蛾が吸い寄せられるのと同様、彼はその魅惑の穴から逃れられない。夢遊病の患者のように、我を忘れた動作で、彼女の洞(ひにん)穴に自分自身を押し当てる。
「そうそう、それでいいんですよ。さあ、遠慮なんていりません。たっぷり溜まった

あなたの厄（ザーメン）、早くお祓（セックス）いでスッキリさせちゃいましょう……？」

尻を左右に振って亀頭を擦り付けつつ、早苗は彼を誘ってみせる。言われるまでもない。彼は早苗の腰を両の手でがっしりと固定すると、いきり立つ己の大幣を早苗の膣内へとねじ込んでいく。

「あぁっ、そう、これこれッ、これを待ってたのぉ」

歓喜に打ち震えるような法悦の声をあげ、早苗は身を震わせる。後ろからでは顔を見ることはできないが、どのような表情をしているかは明らかだった。

ずっ、ずっとペニスを突き進めるたび、襞の一枚一枚が丹念に絡みついてくる。世の中には淫魔とかいう精気を啜る女妖怪がいるそうだが、その淫魔ですらこれほどの名器は持ちあわせていないだろう。彼は感動すら覚えていた。これほど夢中にさせてくれるものが、この世に存在していたとは。

彼は感謝し、礼としてその穴をたっぷりと満足させてやろうと考える。そのためには、腰が立たなくなるまでがっつりと穿ってやらなくては。

「イカせてやる……イカせてやるぞぉッ」

獣の呻きのような声をあげ、彼は腰を突き進める。やがてその猛々しい杭が彼女の身体に根本まで埋められ、先端が早苗の奥の奥、子を成す小室の扉へ押し当てられる。

早苗は喉の奥から鳴るような、甘い声をあげた。
「あぁっ。すごい、ぴったりみっちりハマッてます。体の相性ぴったりなんですね、私達って。はァ、こんなおちんぽにずぼずぼされちゃったら、私ぃ……」
「私ぃ……」――どうなるというのか。彼はそれをわざわざ問うような野暮な真似はしない。尋ねるまでもなく、実力行使で答えを引き出せばいいからだ。
彼はゆっくりと腰を動かし、早苗の熱い蜜壺をかき回し始める。膣襞は海藻のように揺らめき、絡みつき、一物を抱きしめてくる。なんとも妖しげだ。
「うぉぉっ」
彼は思わず驚き混じりの声をあげる。危なかった。一度射精しておいてよかった。もし溜まったままコトに及んでいれば、挿入(いれ)た途端に果ててしまっていたことだろう。それではあまりにも、一人の男として情けない。
しかし今も、油断はできない。少しでも気を抜けば、あっという間に射精しそうだ。彼は気合を入れ直し、早苗への抽送を開始した。
「あっは、エラが私のおまんこの中引っ掻いてるっ、これいいっ、これいいのぉ」
彼が早苗の身体の虜となっているのと同様、早苗も彼のモノに夢中になっていた。出会ったときの、娘らしい可愛さは既に彼女から消え失せた。そこにいるのは立派な

一人の娼婦であり、ひとつの「穴」だった。

――娼婦相手に、何をためらうことがあるだろう。何を遠慮することがあるだろう。むしろ楽しめるだけ楽しまなくては、相手に失礼というものだ。

家を建てるために大地へ杭を打ち付けるときと同じ、力強いストロークで腰を叩きつける。彼の腹肉と早苗の豊かな尻肉がぶつかり合い、ばちんっ、ばちんっと小気味よい音を立てる。素晴らしく耳心地の良い音楽だった。もっと聞きたいと思った彼は、抽送のペースをより上げていく。

「ァあっ、は！　これこれっ、厄祓（セックス）いはこうじゃなくっちゃっ。ねえ、どうですかぁ？早苗の身体は気持ちぃーですかぁ？」

答えるまでもない。言葉の代わりに、彼は行動で返事してみせる。彼女の腰から手を離し、自身の種に汚れる早苗の乳房を、握りつぶすほどの勢いでがっしと掴んだ。

「ァぁん！」

早苗は痛みとも快感ともとれる悲鳴をあげ、電気を浴びたかのように背を反らす。掌に汚濁がつくが、気にすることはない。そんなことを気にして手を離すなど、馬鹿でもやらないことだ。掌に余る早苗の果実を、牛の搾乳をするかのように搾りながら、彼は罵声を浴びせかける。

「おら、どうだ俺のちんこはっ。最初っからこれが望みだったんだろうが、えぇ？」
「そうですう、知らない男の人におみくじを引いてもらうのが大好きだから、あんなこと言って誘ったんですっ、んぅ！」
その言葉を証明するかのように、早苗は彼の動きに合わせて自ら腰を振ってみせる。豊かな尻肉がそれに合わせて細かに震え、彼の視界を喜ばせる。
彼女は髪を振り乱し、膝をガクガクと震わせる。愛汁がぷしぷしと噴き出し、地面や彼の脚を濡らしていった。その態度が、その反応が、彼女の言葉が嘘でないということの何よりの証だった。
「ハッ、それで避妊もなしに生ハメセックスか、とんでもない淫乱め。膣内射精されても文句は言えねぇって、分かってるよなぁ!?」
「あぅ、はいっ、びゅるびゅるしてくださいっ、早苗の痴女おまんこにどぴゅどぴゅして、あなたの三擦り半の半分だけでも私にお恵みくださいぃーッ」
その言葉が本心のものであると証明するかのように、彼女の肉穴はうねり、締り、彼の剛直に絡みついて、一心に子種を搾り取ろうとしている。ここまでされて膣外に射精すなど、とてもありえない話だった。
種をぶち撒けるため一心不乱に腰を振る彼の視界の端に、ふと、桃色の棒状の物が

映る。先ほどまで早苗の膣を躾けていた張り型だ。躾け役という立場は、生憎と本物に奪われてしまったが、それでも己の天命を忘れたわけではないと主張するかのように、地面でぶぶぶぶ、と震え続けている。

彼は一つの発想を得、その素晴らしさにニタリと笑う。見た者に嫌悪心を抱かせるような、邪悪な笑みだ。早苗の身体を穿ちながら、彼はそれを拾い上げた。

早苗から分泌された水分は半ば乾いていた。土に汚れてもおらず、そのまま使えるだろう。彼は桃色のそれを相棒であるかのように眺め、早苗の「もう一つの入り口」へとあてがう——小さく窄まった肛門へ。

「え、ひっ!?」

その瞬間、早苗はまるで生娘のような反応を示した。どうやらこちらでの楽しみは知らないらしい。ならば、きっちりと教えてやるというのが人情というものだ。教育方針はスパルタでいこう。遠慮をするなと言ったのは、他ならぬ早苗自身なのだから。

指先に力を込め、張り型の先端を呑み込ませようとする。経験の浅い早苗の肛門は口を硬く閉ざし、それを受け入れようとしない。

「おい、力み過ぎだ。リラックスしろって」

「そんなっ、こと、言われてもっ。そんなの無理ですって、入りませんよぉ」

本当にアナルでの経験は皆無だったらしく、早苗は情けない声をあげて拒絶の意を示す。しかし、仮に泣こうが喚こうが、許してやるつもりは毛頭ない。
「なるほどね。力を抜けないってんなら、無理にでも抜かせてやるよ」
「えっ、うあぁぁ！」
どずん、と、最大のストロークで子宮口を突いた。早苗は雷に打たれたかのように一瞬痙攣する。その隙を彼は見逃さない。脱力した菊門へ張り型を突き込む。亀頭の部分が入ってしまえば、あとは速かった。
「おあっ!?」
裏声混じりの獣のような声があがる。早苗は壁に頭をぶつけそうな勢いで首を振りたくり、初めてにして大きすぎる衝撃に翻弄される。
「おい、こんなのまだ序の口だぞ。半分も挿入っちゃいないんだから、ヘタれてる場合じゃないぜ」
早苗には悪いが、彼にとってはとても都合が良い。というのも、張り型を潜らせた瞬間から、膣の締りが一段と良くなったのだ。全身が異物に反応している、その反応のうちの一つということなのだろう。
とはいえ、未開発の人間が試すには、張り型は大きすぎる。まぶされていた愛液が

ローションになっている分まだましだが、それでも早苗の尻穴はみちみちと拡がっており、限界寸前であることは明らかだった。本当に裂けかねない。

「はーっ、はーっ、あーっ」

苦痛か、あるいはもっと甘美な別の感覚に耐えているのか、彼女は俯き、壁にほぼもたれかかるようにして、肩で息をしている。時折人語らしきものを呟こうとするが、それは明確な形を持たないまま空中へと消えていく。一杯一杯のようだが、彼は気にする様子も見せない。ここで下手に容赦すれば、痛い思いだけして終わることになる。そういう理屈だったが、要は自分の嗜虐心がまだ満足していなかった。

「おらおら、休んでる暇はねぇぞ」

もし彼に自分を省みる余裕があったなら、その声色の凶悪さに驚いたことだろう。しかし、今の彼の思考は欲望に埋め尽くされていた。欲望が人格を乗っ取り、いかに気持ちよく射精(たねつけ)するかという点のみを彼に追求させる。

「も、もう、堪忍してください……」

息も絶え絶えの早苗は、やっと紡ぎだした言葉で懇願するが、雄の欲がそんな可愛らしい願いを聞き入れるはずもない。彼は鼻息荒く、張り型をねじ込んでいく。

「あっ、ぐ、ふぅぅっ、ふーっ」

彼女の肉孔は今にも壊れてしまいそうな様だったが、それでも己を侵略する無機物を健気にも咥えこんでいく。出す場所から挿入る場所への転生が行われつつあった。

長い時間をかけ、ようやく張り型が早苗の肛内へ入りきった。尻穴から桃色の棒が可愛らしく突き出ている様は、排泄を思い起こさせてどこか間抜けである一方、本来の用途とは違う楽しみ方をしているという背徳感も覚えさせ、彼に優越感と満足感を覚えさせる。

「ぬ、抜いて、抜いてくださいぃ」

早苗は息も絶え絶えという様子だった。全身に浮かぶ汗が月光を反射しきらきらと輝き、その肌は薄紅に染まっている。

「おう、後でまたたっぷりヌいてやるから覚悟しとけ、うん」

彼女の懇願を聞き流し、彼は慣らすようにゆっくりと腰を動かし始める。もう片方の穴にも入っているだけあってか、先程よりもずっときつく、締まって感じられる。

「ひっ、あぁぁっ、おちんぽ、おちんぽやめてェッ」

苦痛の中にありながらも、よく開拓された彼女の身体は抽送に対し確実に反応する。ある種、雌の性とでもいうべき有り様だった。彼女は未知の苦痛と快楽から逃れようとしてか尻を左右に振るが、膣内に埋まる彼のモノを悦ばせることにしかならない。

「安心しろよ、お前ぐらいの淫乱娘なら、痛みなんかすぐに忘れちまう。すぐケツ穴でヒィヒィよがれるようになるからな」

既にその兆候は現れていた。彼が自身の腰の動きに合わせて張り型を抜き差ししてやると、どちらの門も、己を埋める杭と離れたくないと言わんばかりによく締まり、抱きしめてくる。その心地良さときたら、まるで天使の抱擁――いや、それ以上だ。

「ほぉら、ゆっくり挿入(はい)るぅ」

「うぁアッ」

「んで、出るぅ」

「いひィっ」

「もっかい挿入るぅ」

「あぁアァ」

いい気分だった。彼が腰を、指を動かすたび、彼女は天上の音楽のようなよがり声をあげる。一流の管弦楽団の指揮者になった気分だ。

そして、音楽にはリズムが必要だ。マンネリは飽きをもたらす。彼は早苗も自分も飽きさせるつもりはなかった。

「おらァ！」

「イひぃ！」
不意に張り型を一息に引き抜く。ぬぼっと、空気混じりの粘っこい音が鳴る。
聞き苦しい声をあげて、早苗は背筋を跳ね上げさせた。陰部は緊張し、彼のモノに抱きすがってくる。尻肉が小さく弾む。似たような反応を、彼女は既に何度か見せていた。例えば、おみくじを引いていたときに。
「へへへ、軽くイッたみたいだな、ええ？」
「あっ、ぅあ、お尻、これっ」
誰がどう見ても明らかだった。早苗はあの短い間に尻穴の悦びを覚え、オーガズムを迎えたのだ。外見のみならず、その性質まで、並外れて淫らな身体だ。
早苗の尻穴は、異物の違和感から解放されたからか、ぱくぱくと収縮を繰り返している。磯巾着を想像させる、滑稽で猥雑な様だった。流石に恥じたのか、早苗は手で隠そうとするが、彼は彼女の手を掴み、それを許さない。そしてさらに言葉を重ねる。
「なあ、『お尻』なんてお上品な言い方よせよ。ケツ穴って言っとけ、ケツ穴って」
「け、ケツ穴、早苗の、ケツ穴がぁっ」
「おう。ケツ穴がどうなんだ。イッたのか。正直に言ってみろよ、ええ？」
「は、はひっ、ケツ穴、早苗はケツ穴でイキましたぁっ。ケツ穴をおまんこみたいに

ぐぽぐぽされてイキましたァっ！　ケツ穴ハメハメにハマっちゃいましたァ！」

表通りまで響くほどの、赤裸々な告白だった。彼はこれ以上ないほどの悪党の笑みを浮かべ、いいねぇ、と呟いた。

彼は再び、早苗の肛門に張り型を潜らせていく。排泄る場所から挿入られる場所に生まれ変わったそこは、今度は大きな抵抗もなく、それをすんなりと飲み込んでいく。

「へへ、素直で食いしん坊な良い穴に育ったじゃねぇか。な？　ケツ穴にハメられるのもいいもんだろ？」

「おっ、おぁ、はい、イイですッ、ケツ穴いいのぉぉっ」

下品なよがり声をあげ、早苗は自ら腰を振ってそれを受け入れる。桃のような臀部が円運動を繰り返す様は、滑稽でもあるが、淫靡でもある。少なくとも、彼の股座の槍は、大いに刺激されていた。

「う、これは、くそっ」

早苗が彼に狂わされているのと同様、彼もまた、官能に火のついた早苗の動きに、余裕を奪われつつあった。そう長くはもたないだろう。悠長にしている場合ではない。

彼はまた腰を動かし始める。しかし今度は、先ほどのような慣らすストロークではない。がっつりと射精するための、本気のピストンだ。

全体重の乗った抽送に、彼女の身体が二度、三度と跳ねる。壁がなければ突き飛ばしてしまっていただろう。たわわな乳房がたぷん、たぷんと暴れている。彼は片手でそれを引っ掴むと、握り潰すほど強く揉みしだく。もう片手では張り型を握り、腰と連動させて出し入れさせる。目覚めたとはいえ経験の浅い直腸は、ぎちぎちと悲鳴をあげながらも、ぐぶっ、ぐぶっと悦びの腸液をまき散らす。

「あぁアッ!?　気持ちいいッ、両穴セックス気持ちいぃーッ！　狂っちゃうよぉ！」

「狂えよオラ、そういうふうになりたくて男を誘ってるんだろうがお前は！」

二人の下腹は、様々な汁が混じってどろどろになっていた。しかし、そんなことは気にも留めない。どちらの頭にも、犯す／犯されること、射精する／射精されることしか残っていなかった。まるで獣だ。

路地の入り口から複数の視線を感じる。これだけ大声をあげているのだから、当然聞きつけられているだろう。野次馬達は二人の痴態に、異様な興奮の篭った目を向け、その終着点を今か今かと待ちわびていた。

当然、彼がそれを利用しないはずもなかった。彼は早苗の耳元に顔を寄せ、小悪党じみた声で、ねっとりと囁く。

「気づいてるか、さっきから人が見てるぞ、行きずりの相手にセックスしてる色狂い

の姿をしっかり頭に焼き付けて、今晩のオカズにするんだろうなぁ。……あいつらに挨拶してやれよ。ほら」

言うなり、彼は早苗の両腕を引っ掴み、身体ごと回転させて、強引に路地の入口の方を向かせる。幾人もの男達の視線が、粘液のように二人に降り注ぐ。

――奴らは可哀想だ。これほどの女の痴態を前に、それをズリネタにするしかない。それに比べて、俺はどうだ?こうして己のモノで彼女を蹂躙し、狂わせ、屈服させている。これほどの優越が、他の何によって得られるだろう?

彼は平凡な、ただのつまらない人間だ。彼自身それは自覚しているし、日々発見も驚きもなく働き、たまの休みにだらだらと過ごすだけの生活がそれを証明していた。そんな彼にとって、この優越感は麻薬のような中毒性をもつ、抗いがたいものだった。

「わたっ、私、こちっ、東風谷早苗はァあん!」

早苗の「挨拶」の間も、彼は腰を止めることはしない。自分はこの女を好きにしていいのだ。何をはばかることがあるだろう。

「喘いでんじゃねぇよ。ほら、もう一回最初っから」

「私っ、あひ、東風谷早苗は、知らない男の人を誘って、おっぱいを虐めてもらって、バイブをズボズボしてもらって、それからそれから、おちんぽをペロペロ(フェラチオ)させていた

だきましたぁ」
「それだけじゃないだろ？」
「はひぃっ、それから、このだらしない痴女まんこに生ハメセックスしてもらって、ケツマンコの良さも教えていただいていますぅぅぅっ」
「それで？　最後はどうなるんだ？」
「あひッ、この後、子宮に濃厚子種汁をぶち撒けてもらって孕ませていただくので、みなさま、どうぞ最後までっ、わたしのイクところをご覧になって、今晩のオカズにしてくださひぃぃッ！」
　言葉の終わり際は、嬌声と一体となり掻き消えていった。どろどろした無数の視線が熱を孕み、二人に、もっといえばその結合部に一心に向けられる。観客達の誰しもが期待していた。欲望が解き放たれ、東風谷早苗という人間を汚す瞬間を。
「イクぞ、膣内に射精してやる。子宮まるまる俺の精液で埋め尽くしてやる……！」
「はひ、お願いします、早苗のおみくじまんこであなたの厄、お祓いしてくださいいいッ……！」
　我慢の限界など、とっくの昔に超えていた。膨れ上がったペニスが、睾丸が、早苗の懇願によって最後の枷からも解き放たれ、その存在理由、すなわち孕ませることを

果たさんとする。

彼は片手で早苗の腰をしっかり引き寄せ、もう片手で張り型を奥の奥までねじ込むと、子宮口めがけて己の剛直を叩きつけた。ばしぃん、と、強烈な張り手じみた音が鳴った瞬間、鈴口から熱されたマグマが放出される。

「オラッ、知らない男の種子(ザーメン)植えられてイけっ――！」

「ッ――ひぃいいんッ――!!」

膣肛同時の絶頂に、早苗は全身が一本の刀にでもなったかのように全身を硬直させ、そして激しく痙攣する。彼女の震えに合わせ、その乳房がぶるん、ぶるん、と激しく揺れる。陰裂から愛液が激しく噴き出し、地面は見る影もなくどろどろになる。

彼女の淫穴は、欲望をぶち撒ける雄棒を引きちぎらんとするかのような勢いで抱きしめ、尿道にさえ精虫の一匹すら残すまいとするかのように貪欲に搾り取っていく。身体の中のありとあらゆるものをぶち撒けているような感覚だった。それほどまでに長く、そして激しい射精だった。

ひょっとすると、放ち終わったあと、自分は何もかも吸い取られて骨と皮しか残っていないかもしれない。そんな考えが彼の脳裏をよぎる。同時に、そんなことは些細なことに感じられた。些細なことに感じられるほどの快感が彼の爪先から頭頂すべて

を満たし、まるで全身が一本の男根になったかのような錯覚を覚えさせていた。
「おおっ、おァ、あああぁ」
「ひぃっ、あひっ、アアァァ」
どちらの口から漏れるのも、人間があげるとは思えない嬌声だった。今この瞬間、二人は人間ではなかった。ただ交わうという目的のみのためにある、二匹の獣だった。
彼にとってこの思い出は、忘れられないものとなるに違いない。ぱしり、と機械的な音がして、路地裏に光が迸った。野次馬達に混ざった鴉天狗が、記念すべき瞬間を記録したのだろう。
「あひっ、ひぃ……ちんぽ、いいのぉっ……」
心ここにあらずといった様で、早苗は全身脱力し、そのまま地面へと崩れ落ちた。いきおい、膣内のモノが引き抜かれる。様々な汁にまみれたそれは、出すものを出し切ってようやく落ち着いたようだ。
彼は屈み込み、早苗の様子をうかがう。清らかな少女の可愛らしさは、涙や唾液や汗で見る影もない。瞳は虚ろであらぬ方向を向き、唇からはときおりうわ言が零れる。大きすぎる快楽に、半ば気絶しているようだ。惨めな様だが、しかし、これはこれで不健全な美しさがあった。

上下する肩にあわせ、乳房がふるふると震えている。彼女の子宮はどうやら、彼の欲望を受け止めきるには足りなかったらしく、愛液にまみれた陰裂からとろりと白濁が零れ落ちる。雄と雌の匂いが混じった、何とも卑猥な香りが立ち込めた。

――満足した。その四文字に尽きる思いだ。彼はこれ以上なく満たされていた。

彼は立ち上がり、着衣を整えて路地裏を後にする。表通りへの出口に、十人を優に超える男達が集まっていた。誰も彼も腰を引き内股になっているのは、笑える光景だ。

彼らから期待のこもった眼差しを向けられ、彼は少々面食らう。けれども、それが意味するところは理解できた。――誰だって、「犯りたい」という欲望には敵わない。

「……いいんじゃないですか。どうせ行きずりの男に股を開くような娘だ。相手するのも、一人より大勢のほうが、ずっといいでしょう」

その言葉を聞いた男達は、我先にと路地裏に駆け込んでいく。間もなく、野太い声と甲高い悲鳴が路地裏を満たし、表通りにまで響いた。

守矢神社。改めて訪ねて、「おみくじ」を引くのも悪くない。そう考えながら、彼はその場を後にした。

（了）